



銅屋根で蘇る伝統の校舎 自由学園明日館

1921(大正10)年、羽仁吉一、もと子夫妻は、知識の詰込みではない、新しい教育を実現するため、自由学園を創立した。生徒に自ら昼食を調理させるなど生活と結びついた教育はまさに大正デモクラシー期における自由教育運動の象徴であった。自由学園明日館(みょうにちかん)は、その校舎として、夫妻の目指す教育理念に共感した建築家の巨匠、フランク・ロイド・ライトの設計により建設された。

木造で漆喰塗の建物は、中央棟を中心に、左右に伸びた東教室棟、西教室棟を対称に配している。ライトの第1期黄金時代の作風にみられる、高さを抑えた、地を這うような佇まいも特徴だ。

明日館は、関東大震災、第二次世界大戦による戦災からも免れ、1997年には重要文化財の指定を受けている。しかし、80年の歳月を経た校舎は老朽化が進み、1999年から約3年間にわたり、大規模な保存修理工事が行われた。

銅屋根でオリジナルを復元

明日館の保存修理工事は、重要文化財建造物として伝統的な校舎を保存しながら、有効かつ快適に使用することを念頭に行われた。主要なテーマは「オリジナルの復元」「恒久性を高めるための工夫」「活用のための改善」の3項目。保存修理以前、明日館は長年の維持補修のなかで、完成時と変わっていた部分もあった。そこでオリジナルに戻すための基準を、ライトの直弟子である遠藤新によって講堂が完成された1927(昭和2)年の姿とし、調査が行われた。

保存修理工事において、大きなポイントとなったのが屋根だ。工事以前の明日館の屋根は、度重なる維持修繕の末、黒色の鉄板葺きになっていた。しかし、改修にあたり文献史料の調査を行ったところ、1927年当時の屋根は人工緑青加工の銅板葺きであったことがわかった。そこでこの度の保存修理工事では、オリジナルの姿へ復元するため、人工緑青の瓦棒葺き銅屋根に戻されることになったのである。

2001年、保存修理工事を終えた明日館は、現在、一般見学や文化活動の場として活用されている。古い建物の良さを大切に、現代生活にあわせて使い勝手をよくした明日館。銅屋根で設立当初の姿を蘇らせた明日館は、現在も多くの人が訪れ、温もりのある学び舎の姿を映している。



真鍮製ドアノブ



緑青加工された銅板葺きの屋根



真鍮製の窓金具